

追悼・石井庄司先生

人文科教育学会会長 桑 原 隆

石井庄司先生が、平成12(2000)年10月5日、ご逝去された。ご家族の意向で密葬にされたということもあり、訃報を耳にしたのは一週間ほど後であった。平成8年8月、先生の俳号の名による桐蔭国語教育研究会が、千葉の幕張で開催された時が、お会いできた最後となってしまった。一泊二日の日程で開催され、二日目の朝、早く起きられてホテルの廻りを散策され、ちょうどホテルにもどられた時にロビーでお会いした。先生の散策は、なかなかの早足である。その折りであったかどうか記憶が定かではないが、何回か、「2001年まで生きられたら、3世紀にわたることになる」ということを口にされた。もちろん石井先生ご自身もそれを願ってのことであり、その時の矍鑠とした様子から、私自身もそれを確信していた。あと2か月弱で新世紀の到来であり、3世紀にわたることができただけに、残念至極である。

戦後の新制大学に教科教育の講座が設立されて以来、東京教育大学の人文科教育学の初代教授を長らくつとめられ、昭和39年3月定年退職された。私自身は昭和38年の入学で、入学時には石井先生が最後の年をつとめられていたことになるが、まだ専門科目には入っていない一年生であり、東京教育大学で直接石井先生の講義を受けたり、指導を仰ぐという機会はなかった。その後、西尾実研究を手掛けたこともあって、石井先生には東京都文京区のご自宅に伺うなど、たびたびご指導を受ける機会があった。垣内松三のことは折りに触れて話題にされることがあり、「垣内先生は拳を握りしめてよく机を叩きながら講義した」ということを一度ならず拝聴した。石井先生にとっても印象深いことであつたと推測される。西尾実のこともよく記憶されていた。石井先生の博覧強記と精緻な記憶力には、いつもいつも圧倒され、驚嘆するばかりであつた。

本誌『人文科教育研究』は、東京教育大学時代の昭和50年11月の創刊である。筑波大学への移転を機会に、人文科教育学会を設立しその機関誌として新たなスタートをした。誌名そのものは継承したが、筑波大学での第1号(通巻第VI,平成54年2月28日刊)には、石井先生から巻頭言をいただいた。そのなかで、「万葉集の柿本朝臣人麿歌集に出るという歌に『新治の今つくる道さやかにも聞きてけるかも云々』(巻十二一八五五)というのがありますが、まさに、その心持ちです。」と寄せてくださっている。「新治の今つくる道」、石井先生以来の人文科教育学講座の伝統を受けながら、『人文科教育研究』の道も第27号(2000年8月)と、地道ながらも着実な歩みを刻んでいる。直接、間接のご支援ご教示、ここに深謝申し上げたい。

石井先生の博士号取得の論文は『近代国語教育論史』(東京文理科大学,昭和36年12月)である。筑波大学図書館の博士論文コーナーに収蔵されている。論文は横書きでタイプ印刷されているが、先生の滋味あふれる直筆も印象深く思い起こされる。合掌。